厚生労働科学研究費補助金（認知症政策研究事業）
分担研究報告書

本人ミーティングによる診断後支援の研究
有識者インタビューによる本人ミーティングの促進要因と阻害要因の探索的研究

研究分担者　宮前史子
東京都健康長寿医療センター研究所　研究員

本研究は、本人ミーティングの促進要因と阻害要因を明らかにすることを目的としている。本年度は有識者 3 名に半構造化インタビューを実施し、リフレクシブ・テーマ分析を行った結果、5 つのテーマが生成された。①当事者が主体的に出会い・集まり・語り合い社会へと開かれていくことが本人ミーティングの成立条件である、②制度化と本人ミーティングは本質的に矛盾をはらむ、③本人ミーティングはプロセスであり段階的な発達を経る、④当事者主体性を尊重するサポートが継続の鍵である、⑤本人ミーティングの実装を左右する現実的条件、である。本人ミーティングの本質的定義については有識者間で概ね共有されていた一方、制度化による構造的矛盾が阻害要因として機能しうることが示された。促進要因・阻害要因の全体像の解明には、今後の運営者・参加者へのインタビューが不可欠である。

A. 研究目的

認知症の診断を受けた人は、診断を契機に社会的役割やつながりを失いやすい状況に置かれる。こうした状況への対応として、診断後支援におけるピアサポートの重要性が近年注目されている。ピアサポートとは、同じ経験や立場を持つ人々が互いに支え合う実践であり、孤立の防止やエンパワメントの促進に寄与するものとして、精神保健や慢性疾患領域を中心に広く活用されてきた。

このような文脈のなかで、認知症の当事者によるピアサポートの場として「本人ミーティング」が注目されてきた。本人ミーティングとは、認知症の本人が主体的に集まり、自身の体験や希望、必要としていることを当事者同士で自由に語り合う場であり、2017 年以降、認知症施策の一つとして位置付けられ、地方自治体の事業として全国各地で開催されるようになった（長寿社会開発センター, 2017）。2024 年に施行された認知症基本法および同年策定された認知症施策推進基本計画においても、本人ミーティングは当事者の社会参加・社会発信の機会を創出・促進するための重要な手段として明記されている（厚生労働省, 2024）。

本人ミーティングの実証的研究はいまだ限られているが、Miyamae ら（2023）は、本人ミーティングの場において「希望」や「思いやり」といったポジティブな感情が共有されることを報告しており、本人ミーティングがピアサポートとして機能している可能性を示唆している。

しかしながら、本人ミーティングの実態は多岐にわたる。運営方法やミーティングの雰囲気も様々であり、認知症の当事者が集まらなかったり、継続が困難になったりするケースも散見される一方で、認知症の本人が主体的に関わり、活発な意見交換が行われ、参加者のエンパワメントに繋がっている成功事例も存在する。なぜあるミーティングはうまくいき、あるミーティングはうまくいかないのか、その促進要因・阻害要因に関する知見は依然として不足している。

本研究は、成功している本人ミーティングがどのようなものかを定義し、その促進要因と阻害要因を明らかにすることを目的とする。本研究では、以下の 3 つのリサーチクエスチョンに答えることを目指す。

- 本人ミーティングは具体的にどのように定義されるのか。
- 本人ミーティングの運営を成功させるための促進要因は何か。
- 本人ミーティングがうまくいかなくなる阻害要因は何か。
-

B. 研究方法

1. 研究デザイン・期間・セッティング

本研究は、質的事例研究である。研究期間は 2025 年 11 月から 2026 年 3 月末である。本年度は有識者へのインタビューを実施した。インタビューは対象者の希望に応じて対面またはオンラインで実施した。

2. 分析対象者

本年度の分析対象者は、本人ミーティングの研究・実践・政策形成に深く関わる有識者 3 名（研究者、実践者、行政研修実践者）である。対象者は機縁法により選定した。選択基準は、本人ミーティングまたは認知症カフェ・ピアサポート支援事業等の近接領域の活動における研究・運営・政策提言に 3 年以上の関与実績を有する者とした。

3. データ収集

各対象者に対し、半構造化インタビュー（約 60 分）を実施した。インタビューは 2025 年 11 月に実施した。主なインタビュー項目は、①本人ミーティングの定義・特徴・他の類似活動との違い、②参加者の継続的な参加を促す促進要因、③運営が困難になる阻害要因、④具体的な運営方法と工夫、⑤参加者の体験と意義であった。対象者の同意を得たうえで録音し、逐語録を作成した。

4. 分析

Braun & Clarke（2006）のリフレクシブ・テーマ分析（Reflexive Thematic Analysis）を用いた。具体的には、①逐語録の作成とデータの熟読、②初期コードの生成、③テーマの探索、④テーマの再検討、⑤テーマの定義づけと命名、⑥分析結果の記述という 6 段階のアプローチに従い分析を行った。逐語録の管理および分析には MAXQDA（バージョン 26）を使用した。

（倫理面への配慮）

本研究は、東京都健康長寿医療センター研究所倫理審査委員会の承認を得て実施した（R25-051）。

対象者へのインフォームド・コンセントにあたっては、調査の趣旨と協力依頼を記載した文書を事前に配布し、調査開始時に口頭でも十分な説明を行ったうえで、文書による同意を取得した。調査への協力は自由意思に基づくものであり、協力を拒否した場合および途中で撤回を希望した場合にも何ら不利益が生じないことを明示した。

個人情報の保護については、インタビュー

音声データおよび逐語録を仮名加工情報として取り扱い、研究対象者 ID を割り当てたうえで個人識別情報と研究データを厳格に分離して管理した。結果の公表にあたっては、研究対象者を特定できる情報を含まないよう配慮する。

C. 研究結果

リフレクシブ・テーマ分析の結果、以下の 5 つのテーマが生成された。

テーマ① 当事者が主体的に出会い・集まり・語り合い、社会へと開かれていくことが本人ミーティングの成立条件である

3 者に共通するテーマであるが、「社会へと開かれていく」要素の強調において ID1・ID3 と ID2 の間に濃淡がみられた。

ID1 は、本人ミーティングの本質を〈認知症である本人同士が出会って主体的に語り合う〉こととして定義し、[当事者同士の主体的出会いと語り合い]において〈場所はどこでもよい〉〈本人の主体性に焦点を当てれば何人参加してもよいし継続性も問題ない〉と述べ、形式的条件の非本質性を強調した。また本人ミーティングを〈本来市民としての権利を主張する運動からスタートしている動きである〉とスコットランド認知症ワーキンググループの系譜に位置づけ、〈人とともに生きられる社会を作ることは生存の本質であり尊厳をもって生きる根底にある〉という認識から、当事者の社会参加を基本的人権の問題として語った。

ID3 は、本人ミーティングを「場」としてだけでなく〈本人ミーティングはプロセスだ〉と定義した。〈本人ミーティングには会の発達過程がある〉として、出会い・語り合い・提案という 3 段階を経るものだとし、〈最初は自分の暮らしを良くしたいという小さな願いが仲間とともに社会へ視野が広がるプロセス〉であると語った。また[集められるのではなく自ら集まること]を成立条件として強調した。

ID2 は、本人ミーティングを〈本人ミーティングはグループで行うピアサポートだ〉と定義し、〈本人たちだけで集まって行う「クローズド」なミーティングが本人ミーティングだ〉と述べた。ID2 の語りにおいては「社会へと開かれていく」という方向性は明示的には現れず、ピアサポートとしての機能を中心に本人ミーティングの意義が語られた。

テーマ② 制度化と本人ミーティングは本質的に矛盾をはらむ

3 者に共通するテーマであるが、その語り口はそれぞれ異なっていた。ID1 は原理的・市民運動論的な観点から、ID3 は形骸化への懸念として、ID2 は制度化によるピアサポートの目的の「ぶれ」として語った。

ID1 は、〈本人ミーティングの市民運動としての起源と制度化による変質〉を指摘し、本人ミーティングはシチズンシップライツ(Citizenship Rights:市民権・公民権)に基づく市民運動としてスタートしたものであり、〈行政のレギュレーションが入ると本来的な意味から遠のく〉と述べた。また〈資金提供とレギュレーションの不可分性〉として、行政が資金を出した途端からレギュレーションがスタートするという認識を示した。さらに〈制度的枠組みが本人ミーティングの成立条件を歪める〉として、制度として人数や継続性の担保を求めることが、本人が出会って語り合うという本質的定義と矛盾すると語った。〈行政が本人ミーティングの市民運動的性格を理解しないまま受け入れた無自覚性〉も指

摘されており、制度化の過程における行政側の認識の問題が示された。

ID3 は、〈良い取り組みを普及させようとすると形骸化されてしまう〉として、本人ミーティングや新しい認知症観がセンター方式と同様の道をたどることへの懸念を示した。また〈行政の事業として目標数値が定められたミーティングはうまくいかない〉と述べ、提供側目線での発想や進め方が本人ミーティングの本来の意義を損なうと語った。

ID2 は、〈(ある先駆的な活動)は制度化により「フォーマル」なピアサポートに変化した〉と述べ、もともとインフォーマルな形で行われていた活動が制度に乗ることで、フォーマルで意図的なピアサポートへと変化したと語った。また[政策的なピアサポートの場面ではセルフヘルプグループの機能が弱まる]として、〈制度化により当事者からの提案が求められ、ピアサポートの目的からぶれている〉という認識を示した。一方で〈当事者からの提案は制度的な支えを得るためには意味のあることだ〉とも述べており、制度的位置づけの矛盾を認めながらも、その意義を完全には否定しない複雑な立場が示された。

またID2は本人ミーティングと類似事業との概念的混乱を批判した。〈本人ミーティングと認知症カフェが似ていてはいけない〉と述べ、〈地域の中で認知症カフェと本人ミーティングのすみわけがあいまいになっている〉現状を問題視した。

テーマ③ 本人ミーティングはプロセスであり段階的な発達を経る

このテーマは ID3 に最も豊かに現れ、ID1 に部分的に現れた。ID2 には明示的に現れなかった。

ID3 は、〈本人ミーティングはプロセスだ〉として、本人同士が「出会う→集まる→経験や希望を語り合う→より良い暮らし方や地域についての意見や提案を出し合う」という変遷を示した。この発達過程には 3 つの段階があるとされ、第 1 段階は[出会いの段階]であり、〈仲間といるから認知症になって生きることの前向きな経験が増幅することを実感できる〉ことが特徴とされた。第 2 段階は[語り合いの段階]であり、〈継続することで本人が自分の意見や地域への意識を育てていく〉ものとされた。第 3 段階は[提案の段階]であり、〈回数を重ねると自分たちの声を地域社会に届けなければという思いが育つ〉とされた。

また、〈最初から本人が地域社会に対して要望や意見が語れるわけではないことを知っておく〉ことの重要性が強調され、〈本人ミーティングを始めるときは社会に提言提案する人が現れることを考慮に入れて開催する〉という設計の視点が示された。一方で〈社会に声を上げるステージに 2、3 回で至るミーティングもある〉とも語られており、発達の速度はミーティングによって異なることも示された。

ID1 はこのプロセスの観点を部分的に共有しており、〈開催について初期はサポートが必要だが徐々に主体的なグループになっていく〉と述べ、サポートからエンパワメントへという移行を認識していた。

テーマ④ 当事者主体性を尊重するサポートが継続の鍵である

3 者に共通するテーマであるが、語りの内容と比重はそれぞれ異なっていた。

ID1 は、[支援する側が留意すべき主体性尊重の原則とプロセス]として、〈本人の主体性以外に開催をサポートする人は必要だ〉と

しながらも、〈当事者主体性を尊重するサポートという実践的原則がある〉と述べ、サポートする人が本人の主体的な出会いと語り合いを尊重しないようなサポートをすることは問題であると語った。また〈開催について初期はサポートが必要だが徐々に主体的なグループになっていく〉とも述べ、サポートからエンパワメントへという移行を認識していた。さらに[定義の柔軟な解釈が実践を活性化する]として、〈当事者が主体的に集まり語り合っているのであれば朝のミーティングも本人ミーティング〉と述べ、御坊市の例のような柔軟な解釈が実践の機動力につながるという観察を示した。

ID2 は、[スタッフは参加者の主体性を損ねないようにする]として、〈スタッフは本人の主体性を損ねないよう黒子に徹する〉ことが重要であると語った。

ID3 は、当事者主体性の尊重を運営全体に関わる原則として幅広く語った。〈行政も運営も本人たちも水平の関係で地域の認知症の人たちの暮らしについて語り合う場を作れるかがコツ〉と述べ、[本人と運営が水平の関係で活動する]ことを基本姿勢として示した。また[目的を運営も参加者も共有できているか]として、〈ミーティングの目的を運営も参加者も共有できているかがうまくいくコツだ〉と述べ、〈目的が曖昧なままのミーティングは先細りする〉と語った。〈楽しさを目的にすると競合する活動に負ける〉という指摘も示された。

さらに ID3 は、〈ミーティングの初期の目的は日々の暮らしをよくするという小さなところから始めると受け入れられやすい〉と述べ、小さな目的から出発することの重要性を語った。また〈振り返り会で本人の声の意味を掘り下げることが継続の質を高める〉とし、〈運営者も回数を重ねるごとに本人の声の価値を体感していく〉という変化を示した。参加者の成長については、〈参加者の成長やグループの成熟は小さな成功体験の積み重ねが鍵である〉と述べ、声を出すことの意味に本人たちが気づいていくプロセスの重要性が語られた。

加えて、〈認知症の人ではなく人生経験を積んできた大人なのだ〉という視点から、〈問題の多い参加者に見えても深い考えを持っていることがある〉として、当事者を見くびらない姿勢が強調された。また〈本人を置いてきぼりにした企画はうまくいかない〉として、家族も含めたレク的な交流会は本人ミーティングではないと述べ、〈本人ミーティングの発達段階を意識しながら運営する〉ことの重要性も語られた。

テーマ⑤ 本人ミーティングの実装を左右する現実的条件

このテーマは主に ID2 から現れた。今後の追加インタビューによってさらに豊かになることが期待される。

ID2 は、本人ミーティングの実装を左右する現実的条件として、参加者の確保に関わる医療機関との連携、地域特性、そしてコア当事者の存在を挙げた。

参加者の確保については、〈本人ミーティングに参加したい人を見つけるには認知症疾患医療センターとの連携は必要〉であり、〈診断を受けた人は医療機関または包括との連携がないと紹介してもらえない〉と述べた。また[地域特性により参加する本人の見つけやすさに差がある]として、〈地方だと参加可能性の高い本人が見つかりやすい〉一方で、〈地方だと地域に社会資源がなく専門職が

いないことがある〉という両面が示された。〈地方だと関係者が把握しやすく協働がしやすい〉という地方の強みも語られた。

コア当事者の存在については、〈開始時に発言力のあるコア当事者がいるとやりやすい〉として、最初の段階で積極的に発言できる当事者の存在が実装の鍵となることが示された。また、〈発言でき全体を見て引っ張っていくコアとなる本人が必要だ〉と述べるとともに、〈コアとなる人の意見を他の当事者にも受け入れられるよう調整することが必要〉であると語り、コア当事者の声を最大限に活かしながら他の参加者にもなじませていく場づくりの重要性が示された。

D. 考察

本分析で得られた 5 つのテーマは、テーマ①を中心に据えた構造として理解できる。テーマ①「当事者が主体的に出会い・集まり・語り合い、社会へと開かれていくことが本人ミーティングの成立条件である」は、本人ミーティングの本質的定義を示すものであり、他の 4 つのテーマはこの定義を多角的に支える位置にある。

テーマ③「本人ミーティングはプロセスであり段階的な発達を経る」は、テーマ①で示された成立条件が静的なものではなく、出会い・語り合い・提案という段階を経て動的に展開するものであることを示しており、定義をプロセスの観点から補完するものといえる。

テーマ②「制度化と本人ミーティングは本質的に矛盾をはらむ」は、テーマ①で示された本質的定義が現在の政策的・制度的文脈においていかに歪められやすいかを示す構造的課題として位置づけられる。行政によるレギュレーションや目標数値の設定、形骸化のリスクは、本人ミーティングの成立条件そのものを損なう阻害要因として機能しうる。

テーマ④「当事者主体性を尊重するサポートが継続の鍵である」は、テーマ①の成立条件を実践的に支える促進要因として位置づけられる。当事者主体性を尊重するサポートのあり方、目的の共有、振り返りの質、小さな成功体験の積み重ねといった要素は、本人ミーティングがその定義に沿って継続・発展するための具体的な条件を示している。

テーマ⑤「本人ミーティングの実装を左右する現実的条件」は、現時点では主にID2の語りから生成されたテーマであり、今後の運営者・参加者へのインタビューを通じてさらに豊かになることが期待される。医療機関との連携や地域特性、コア当事者の存在といった条件は、テーマ①の成立条件を地域の実装レベルで左右する促進・阻害要因として機能するものと考えられる。

E. 結論と今後の課題

本年度の有識者インタビューの分析から、本人ミーティングの本質的定義、すなわち、当事者が主体的に出会い・集まり・語り合い、社会へと開かれてくことについては、立場や視点の違いを超えて 3 者の間で概ね共有されていることが示された。一方で、本人ミーティングが市民運動としての起源を持ちながら行政施策として制度化されているという構造的矛盾は、本質的定義を歪める阻害要因として機能しうることが、有識者の語りから明確に示された。促進要因・阻害要因の全体像については、本年度の有識者インタビューによって萌芽的な知見が得られたが、成功事例の運営者・参加者の視点を加えること

で初めて包括的に明らかになるものであり、今後の調査が不可欠である。

本年度のデータは有識者の視点に限定されており、今後の調査によって以下の点を明らかにする必要がある。

第一に、成功事例の運営者・参加者へのインタビューを通じて、テーマ④およびテーマ⑤をより豊かに記述することが必要である。特にテーマ⑤は現時点では萌芽的なテーマにとどまっており、運営者・参加者の語りによって促進・阻害要因の全体像が明らかになると考えられる。

第二に、有識者間でみられた認識の差異をさらに検討する必要がある。特にテーマ①における「社会へと開かれていく」要素について ID1・ID3 と ID2 の間にみられた濃淡、およびテーマ②における制度化への評価の違いは、本人ミーティングの定義や意義に関する多様な見解を示しており、追加インタビューで深める価値がある。

引用文献

Braun, V., & Clarke, V. (2006). Using thematic analysis in psychology. *Qualitative research in psychology*, *3*(2), 77-101.

長寿社会開発センター. (2017). 認知症の人の視点を重視した生活実態調査及び認知症施策の企画・立案や評価に反映させるための方法論等に関する調査研究事業（平成28 年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業). 一般財団法人長寿社会開発センター. chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://nenrin.or.jp/center/pdf/h28_report_01.pdf

厚生労働省. (2024). 認知症施策推進基本計画. https://www.mhlw.go.jp/content/001344090.pdf

Miyamae, F., Sugiyama, M., Taga, T., & Okamura, T. (2023). Peer support meeting of people with dementia: a qualitative descriptive analysis of the discussions. BMC geriatrics, 23(1), 637.

F. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

宮前史子・杉山美香・多賀努・森倉三男・岩田裕之・見城澄子・山村正子・金子真由美・佐々木知輝・岡村毅. (2025 年 5 月 31 日–6 月 1 日). 本人ミーティングを通じた認知症当事者のエンパワメント：発言の変化に見る認知症理解の深化と当事者意識の獲得 [ポスター発表]. 第 26 回日本認知症ケア学会大会, 福岡, 日本.

G .知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む.）

1. 特許取得

該当なし

2. 実用新案登録

該当なし

3.その他

該当なし

表 リフレクシブ・テーマ分析の結果

総括テーマ	テーマ	サブテーマ
テーマ１:当事者が主体的に出会い・集まり・語り合い、社会へと開かれていくことが本人ミーティングの成立条件である	当事者同士が主体的に出会い・集まり・話し合う	同じ立場の当事者たちが参加する
		主体的に集まることが最重要
		集められるのではなく自ら集まること
		当事者同士の出会いの切実な希求がある
		当事者たちの主体的な活動である
		ピアサポートである
		当事者同士の主体的出会いと語り合い
		基本的人権を背景に持つ
	社会へと開かれた意見を持つ	意見や提案を話し合う場
		語り合いとより良い暮らし方が核心
		市民運動的要素をもつ
テーマ２:制度化と本人ミーティングは本質的に矛盾をはらむ	良い取り組みを普及させようとすると形骸化する	
	制度化による本人ミーティングの本質からの逸脱	制度化による自発性の喪失
		制度化による目的の矮小化
		行政によるレギュレーションと市民活動的性格の矛盾
	行政の事業として目標数値が定められたミーティングはうまくいかない	
	政策的なピアサポートの場面ではセルフヘルプグループの機能が弱まる	
テーマ３:本人ミーティングはプロセスであり段階的な発達を経る	本人ミーティングには会の発達過程がある（+）	出会いの段階
		語り合いの段階
		提案の段階
	本人ミーティングはプロセスだ	

表 リフレクシブ・テーマ分析の結果（続き）

総括テーマ	テーマ	サブテーマ
テーマ４：当事者主体性を尊重するサポートが継続の鍵である	本人と運営が水平の関係で活動する	
	質の良い振り返りの会ができている	
	本人ミーティングの発達段階を意識しながら運営する	
	ビジョンとミッションを地域全体で共有できるかがカギ	
	当事者を見くびらない	
	小さな成功体験の積み重ね	
	目的を運営も参加者も共有できているか	
	最初は小さな目的から始めると受け入れられやすい	
	目的が曖昧なままのミーティングは先細りする	
	本人を置いてきぼりにした企画はうまくいかない	
	支援する側が留意すべき主体性尊重の原則とプロセス	
	定義の柔軟な解釈が実践を活性化する	
テーマ５：本人ミーティングの実装を左右する現実的条件	参加する本人を紹介してくれる機関との連携が必要	
	地域特性により参加する本人の見つけやすさに差がある	
	コア当事者の存在があるとうまくいきやすい	